

朝鮮式山城の外交・防衛上の機能の比較研究からみた鞠智城

柿沼 亮介

はじめに — 鞠智城の特異性 —

古代山城(一)は対馬、大宰府周辺、瀬戸内海沿岸に集中しているが【第1図】、その中で鞠智城の特異性として挙げられるのは、その位置と立地条件である。

対馬の金田城は、対馬南部の北西に面した海沿いにある【第2図】。城の北側と西側は断崖となっており、傾斜が緩やかな東側に三つの城戸がある他、各所に掘立柱建物跡も確認されている。頂上からは朝鮮半島をも望むことができ、後述するように、朝鮮半島南部を出発した船が北西風にのって対馬に向かうのに対応していると考えられる。多分に最前線における防衛を意識した城であるといえる。

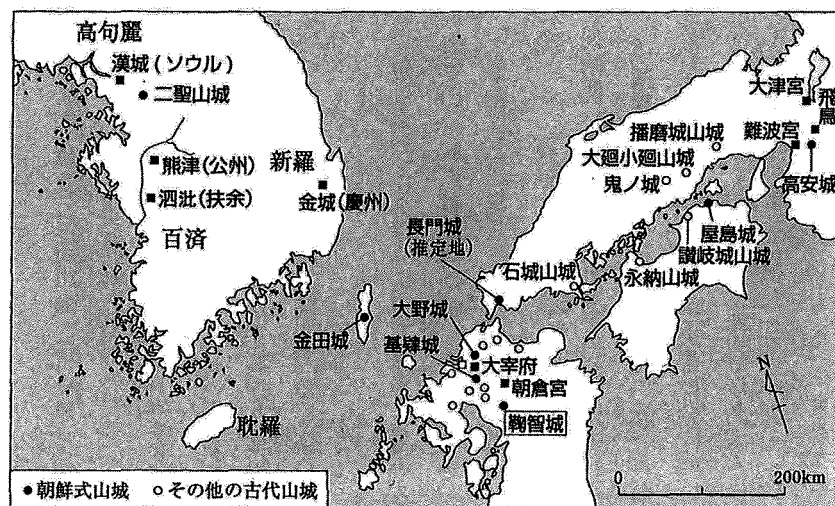
大野城・基肄城、そして水城は、大宰府を防衛するために設置された。大宰府は、福岡平野と筑紫平野を結ぶ山に囲まれた回廊部に位置するが、大野城は福岡平野側を、基肄城は筑紫平野側を望むことができ、大宰府の「二正面」の防衛を担ったといえる。

瀬戸内海沿岸の山城は、西からまず関門海峡を望む位置に長門城が置かれ、周防灘を東へ進む船舶がよく見渡せ、かつ山陽道も抑えられる位置に石城山城が配置されている。さらに、山陽道のほぼ中央に位置する吉備には、備後地域に常城と茨城、備中に鬼ノ城、備前に大廻小廻、そして播磨に城山城が配される。一方、対岸の四国には、伊予に永納山城、讃岐に城山城と屋嶋城が設けられている。

讃岐の城山城や屋嶋城からは瀬戸内海を航行する船をよく見渡すことができ、鬼ノ城は山陽道や岡山平野をのぞむ位置にある。【第3図】また、立地条件も、

険峻な山上に高い土塁や石垣の城郭を鉢巻状に廻し、城内には兵舎や倉庫などを建て、一部には鍛冶工房を設けるなど、防御性に富み、籠城にも耐えられるような堅固な城であった(狩野二〇一一)。

以上のように、対馬、大宰府周辺、瀬戸内海沿岸の山城は、防衛を強く意識した構造になっており、さらに、高橋誠一氏が指摘したよ



第1図 古代山城の配置



第2図 金田城より対馬の西海岸を望む

うに古代官道に沿う位置に配されている（高橋一九七二）。

また、大阪湾と大阪平野をのぞむ高安城は、大和と河内を隔てる生駒山地の南端に位置する。古代山城の中で最も東に置かれ、最後の防衛ラインといえることができる。倉庫礎石群が発見されているが、狩野久氏は、天智・天武・持統の三天皇が高安城に行幸（三）していることから、火急の際の御座所が置かれていた可能性を指摘している（狩野二〇一一）。

それに対して、鞠智城は、これらの古代山城と性格を異にしている。まず、位置であるが、他の山城は後述するような対馬、大宰府、関門海峡、瀬戸内海を通る外交使節の上京経路及びそれに隣接する陸路である山陽道に沿って配置されている。一方で鞠智城は、車路によつて官道に出られるようになってはいるものの、外交使節の上京経路からは大きく外れている。また、菊鹿盆地を一望する位置にはあるが、菊鹿盆地と有明海との間に丘陵があるため、有明海そのものを監視できる位置にはない。つまり、一見すると外国

からの来襲に備えてつくられたとは考えにくいのである。

また立地条件も、鞠智城は、標高一〇〇〜一六八・九メートルと、他の山城と比較して際立って標高の低いところにつくられている。

【第1表】金田城や屋嶋城も相対的には低いものの、金田城は非常



第3図 瀬戸内海沿岸の山城

に急峻なところがあり、また屋島は讃岐平野の中の半島型溶岩台地で独立峰のため、どちらの城も、眺望にも防衛機能にも優れていたと考えられる。

以上のように鞠智城は、その位置も立地条件も、他の古代山城と比して特異な存在であるといえる。では、なぜこの位置に鞠智城は設けられ、またその後も存続したのであろうか。本稿では古代国家における外交や防衛のあり方から考えてみたい。

第1表 古代山城の配置

名称	所在地	標高 (m)	全長 (km)	水門	城門
金田城	長崎県対馬市美津島町城山	275	28	3	3
大野城	福岡県太宰府市ほか四王寺山	410	6.5	1	8
基肄城	佐賀県三養基郡基山町基山	415	3.9	1 (+)	3 (+)
鞠智城	熊本県山鹿市・菊池市	100～168.9	5 (?)	1	3
屋嶋城	香川県高松市屋島	280	?	?	?
高安城	大阪府八尾市高安山	438～488	?	?	?

一、律令国家における外交使節の来日
鞠智城の配置について考える前提として、まずは外交使節がどのような来日したのかについて検討する。

一般に東アジアの外交使節は、相手国の窓口となる都市にまずは滞在し、都にのぼる許可を得た者が都に向かって上京（入京）し、相手国君主への謁見などの行事に臨んだ。例えば日本の遣唐使の場合、その後期には「四つの船」に合わせて五〇〇～六〇〇人が乗り込んで入唐したうち、上京できた人数は一割にも満たないこともあり（石見二〇〇九、東野二〇〇七）、残りの者は揚州などに滞在した。このように遣唐使の入京が制限されたことの背景としては、滞在費・旅行費が唐側の負担であったことや、特に唐帝国の前半期には、人や物の移動を制限することによって、情報や文物の流出を防ぎ、経済的にも文化的にも優位性を保とうとしたことが想定されている（古瀬二〇〇三）。

日本においても、来日した外交使節のすべてが入京を許されたわけではなかった。例えば天平勝宝四年（七五二）に来日した新羅使の場合、『続日本紀』天平勝宝四年閏三月己巳（二十二日）条に、大宰府奏、新羅王子韓阿湊金泰廉、貢調使大使金暄及送王子使金弼言等七百余入、乗二船七艘来泊。

とあるように、大宰府が七〇〇余人の来日を報告したが、『続日本紀』天平勝宝四年六月己丑（十四日）条に、

新羅王子金泰廉等拜朝。并貢調。因奏曰、新羅国王言日本照臨天皇朝廷。新羅国者、始自遠朝、世々不絶、舟楫並連、来奉国家。今欲国王親来朝貢進御調。而顧念、一日无

主、国政絶乱。是以、遣王子韓阿湊泰廉、代王为首、率使下三百七十余人入朝、兼令貢種々御調。謹以申聞、詔報曰、新羅国、始自遠朝、世々不絶、供奉国家。今復遣王子泰廉入朝、兼貢御調。王之勤誠、朕有嘉焉。自

「今長遠、当^レ加^二撫存^一」。泰廉又奏言、普天之下、無^レ匪^二王土^一、率土之浜、無^レ匪^二王臣^一。泰廉、幸逢^二聖世^一、来朝供奉、不^レ勝^二歡慶^一。私自所^レ備国土微物、謹以奉進。詔報、泰廉所^レ奏聞之。

とあるように、平城京において拝朝・貢調を行った際には三七〇余人になっている。この人数の差の三三〇人程をめぐっては、「送王子使」が含まれていたかどうかや、商人が含まれている可能性についての議論がある（石井一九八七、濱田一九八三）。いずれにしても、七五二年の新羅使は大宰府に到着した後、一部の者のみが許されて瀬戸内海經由で畿内へと向かったと考えられる。

畿内へとやって来た外交使節がまず滞在したと考えられるのは、難波である。難波津を有する瀬戸内海への窓口であった難波は、内陸に位置する飛鳥・奈良の外港として発達した。日本の遣唐使や遣新羅使は都を出た後に難波から出航している他、高表仁^(三)などの唐使や、各回の新羅使などのような外国からの外交使節も、難波を經由して入京した。

このような位置にあった難波には、六世紀以降、多くの外交関係の施設が置かれていた。例えば「難波館^(四)」や、「百済客館^(五)」、「高麗館^(六)」、「三韓館^(七)」、「新館^(八)」などは、外国の使節を接待する宿泊施設で、後の鴻臚館に相当するものと考えられている（直木一九九一）。

難波における外交使節の滞在や迎賓機能は、八世紀以降も存続していたと考えられ、実際、七五二年の新羅使の場合も、『続日本紀』天平勝宝四年七月戊辰（二十四日）条に、

泰廉等還在^二難波館^一。勅遣^レ使、賜^二絁布并酒肴^一。

とあるように、帰国に際して「絁布并酒肴」を賜うための勅使が「難波館」に遣わされている。

以上のように、古代の外交使節は大宰府↓瀬戸内海↓難波というルートを通じて来日し、その際に大宰府や難波において、外交儀礼を行ったり、入京させるかどうかなどの日本側の判断を待ったりしたのと考えられる。このような外交使節の入経路をめぐる意識は、史料にも顕れている。『日本書紀』白雉二年（六五一）は歳条に、

新羅貢調使知萬沙漚等、着^二唐国服^一、泊^二于筑紫^一。朝廷惡^二恣移^一俗、訶噴追還。于時、巨勢大臣、奏請之曰、方今不^レ伐^二新羅^一、於後必當有^レ悔。其伐之状、不^レ須^二挙力^一。自^二難波津^一、至^二于筑紫海裏^一、相接浮^二盈艫舳^一、徵^二召新羅^一、問^二其罪^一者、可^二易得^一焉。

とある。すなわち、新羅使が唐の服装をしてきたことを咎め、その際に巨勢大臣が新羅に軍事的圧力をかけるよう主張している中で、難波津から筑紫海裏まで船を並べるといふ表現をしているのである。このことは、古代において、難波・筑紫・朝鮮半島が一直線にあるという地理感覚があったことを示していると考えられる。

しかし、すべての外交使節が大宰府↓瀬戸内海↓難波ルートをとったわけではない。渤海使や遣渤海使は基本的には北陸や出羽など日本海岸を発着点としたものと考えられている（古畑一九九四）。天平宝字三年（七五九）の渤海使のように、対馬に漂着して大宰府を經由して難波に至っている例^(九)もないわけではないが、これは海流に流された結果であり、帰路は北陸から出航していると考えられる（上田二〇〇二、藤井二〇一〇）。新羅と対抗関係にあった渤海にとつて、朝鮮半島東岸沿いに南下するルートを取ることは現実的で

はなかったといえるだろう。

しかし、八世紀の後半の一時期ではあるが、日本は渤海に対して筑紫ルートでの来日を求めている事例がある。『続日本紀』宝龜四年（七七三）六月戊辰（二十四日）条では、能登国に漂着した渤海使烏須弗に対して、「表函」が「違令无礼」のため入京させず放還するとの処分を下したのに続いて、

又渤海使、取_二此道_一来朝者、承前禁斷。自今以後、宜_下依_二旧例_一、從_二筑紫道_一来朝_上。

と告げている。「此道」、すなわち能登から来朝することはかつて禁止したのであるから、今後は「旧例」である「筑紫道」から来朝するようにと伝達しているのである。

さらに、『続日本紀』宝龜八年（七七七）正月癸酉（二十日）条には、

遣_レ使、問_二渤海使史都蒙等_一曰、去宝龜四年、烏須弗歸_二本蕃_一日、太政官処分、渤海入朝使、自_レ今以後、宜_下依_二古例_一向_中大宰府_上。不_レ得_下取_二北路_一来_上。而今違_二此約束_一。其事如何。对曰、烏須弗来歸之日、実承_二此旨_一。由_レ是、都蒙等發_レ自_二弊邑南海府吐号浦_一、西指_二对馬嶋竹室之津_一。而海中遭_レ風、着_二此禁境_一。失_レ約之罪、更無_レ所_レ避。

とあり、越前国加賀郡に到着した渤海使史都蒙等に対して、「北路」をとったことについて詰問している。

このことについて森公章氏は、それまでの渤海使は、日本海岸に到着するというのが既成事実化していたにもかかわらず、「古例」を楯に大宰府への到着を求めていることから、大宰府↓瀬戸内海↓難波というルートが伝統的な入境経路であったことを表していると指

摘する（森一九八八）。

また、石井正敏氏は七七三年以前に渤海に対して出された「北路」からの来朝を禁止する法令が見当たらないことから、宝龜二年（七七二）に出羽国に来朝し_{（一〇）}、違例・無礼の多かったとされる壹万福に対してこの禁止の通達がなされたものと推測する。さらに、大宰府と縁海諸国司への「国書開封権」附与の比較検討から、大宰府の外交上の役割の特殊性を過大に評価すべきでないとし、「旧例」「古例」についても、あくまで渤海の前身とされる高句麗の例に倣って大宰府へ向かうことを求めたに過ぎないとする（石井一九七〇）。

たしかに石井氏が言うように、高句麗使が筑紫經由来日している事例は『日本書紀』に散見される。しかし、先述のように渤海にとつては筑紫ルートをとることは新羅との対抗上現実的ではなかった。しかも、常に先の島が見えている状態で海峡を渡ることができる筑紫ルートと異なり、渤海から日本海を直接南下して日本列島を目指す「北路」をとる場合、来着地が出羽から山陰まで多岐に及んでしまうことは、当時の航海技術からすれば致し方のないことでもあったといえるだろう_{（一一）}。実際、「北路」禁止の通達の後も、渤海使が筑紫ルートで来日した事例は一例も確認できない。

ではなぜ、大宰府↓瀬戸内海↓難波という入境ルートが、「旧例」「古例」であるとする意識が生じたのであろうか。そこには、王権による外交権の確立過程が関係していると考えられるが、それについて検討する前提としてまず、外交使節の入境経路について考えてみたい。

二、古代の入境経路

外交使節はどのような経路をたどって入境したのであるうか。

古代国家の外交拠点というと、一般にまず大宰府や鴻臚館（前身は筑紫館）が想起される。来日する外国の使節や出発する日本の使節が滞在し、「遠の朝廷」と呼ばれる西海道を中心であったこの地が、律令国家における日本の外交窓口であったことは確かである。

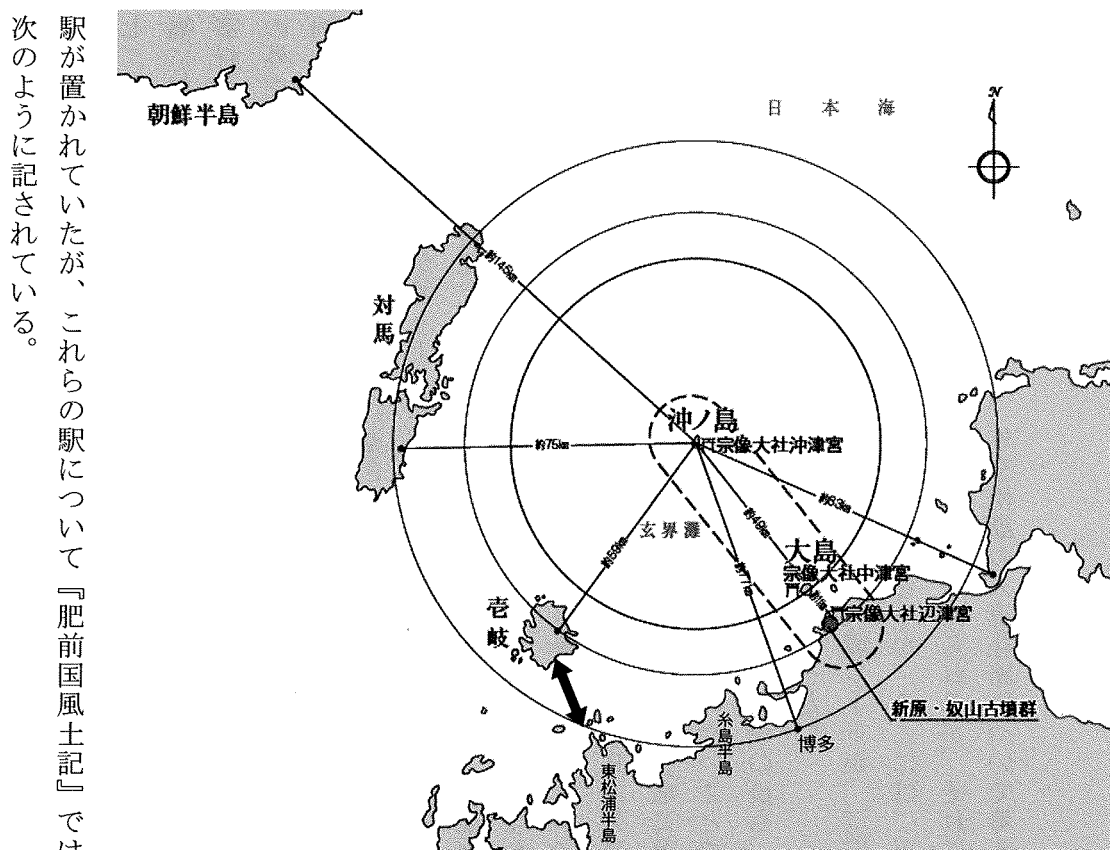
しかしながら、朝鮮半島から北部九州へ至る経路は、直線距離でいえば、対馬・壱岐を経て東松浦半島を結ぶルートが最短となり、このルートであれば常に目標となる島を見ながら安全に航海することができるといえる（『第4図』）。

『魏志』倭人伝においても、

倭人在_二帶方東南大海之中_一、依_二山島_一為_二國邑_一。旧百余国、漢時有_二朝見者_一、今使_二所_一通_二三十國_一。從_レ郡至_レ倭、循_二海岸_一水行、歷_二韓國_一、乍南乍東、到_二其北岸狗邪韓國_一、七千余里。始度_二一海_一、千余里。至_二對馬國_一。（中略）對馬についての説明）又南渡_二一海_一、千余里。名曰_二瀚海_一。至_二一大國_一。（中略）一支国についての説明）又渡_二一海_一、千余里。至_二末盧國_一。（中略）末盧国についての説明）東南陸行、五百里。到_二伊都國_一。（中略）世有_レ王。皆統_二属女王國_一。郡使往来常所_レ駐。東南至_二奴国_一、百里。（後略）

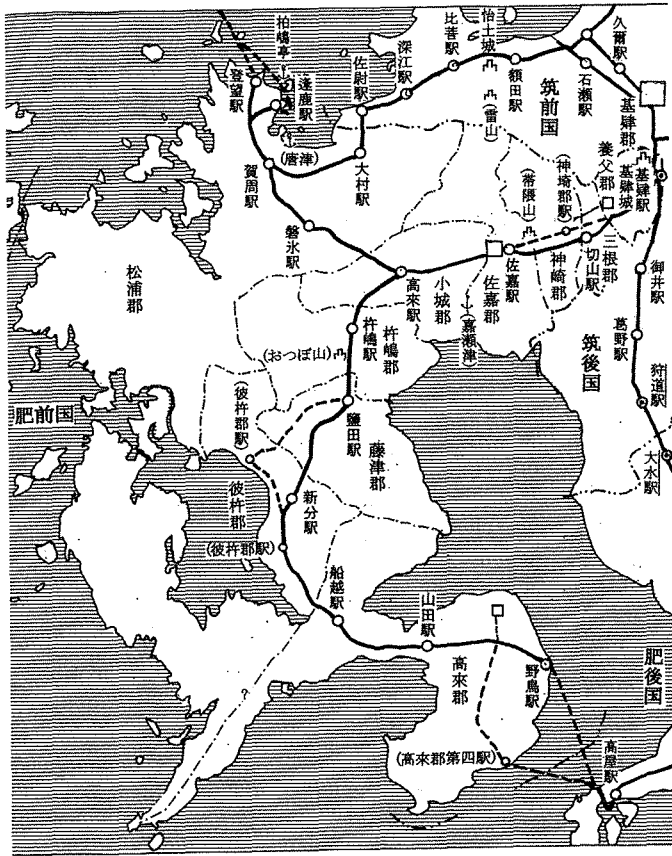
とあり、朝鮮半島にあった狗邪韓国から北部九州へのルートは、対馬・壱岐を経て東松浦半島の末盧国に至り、そこから東に向かうというものであったことが分かる。

後に駅路が整備されるようになってからも、壱岐と九州本土を結ぶのは東松浦半島であった【第5図】。東松浦半島には逢鹿駅と登望



第4図 沖ノ島からみた日本列島と朝鮮半島

駅が置かれていたが、これらの駅について『肥前国風土記』では、次のように記されている。



第5図 九州北西部の駅路

逢鹿駅。〈在二郡西北一〉。
 曩者、氣長足姫尊、欲レ征伐新羅、行幸時、於此道路、有
 レ鹿遇之。因名二遇鹿駅一。々東海、有二蛇・螺・鯛・海藻・海
 松等一。
 登望駅。〈在二郡西北一〉。
 昔者、氣長足姫尊、到二於此処一、留為二雄装一、御負之輶、落二
 於此村一。因号二輶駅一。々東西之海、有二蛇・螺・鯛・雜魚・
 海藻・海松等一。

この記述から、二つの駅について木下良氏は次のように分析して
 いる。逢鹿駅は、東に海に臨むことが記されており、東松浦半島東

海岸の唐津市相賀は、地名からも地形からも記事にあう。また、登
 望駅は東西が海に面することが記され、「トモ」と読むが、唐津市呼
 子町に大友・小友という地名があり、北に突出する小半島になつて
 いて東西が海に面するので、この地が記事にあう。これらの駅は近
 接しているが、逢鹿駅の位置は、北と西を陸に遮られ、東と南が海
 に面することから、冬の北西の季節風を避ける港として好適である。
 一方、登望駅が岬の西側に位置する小友にあつたとすると、北西風
 には不適當であるが、南東風に対しては安全な位置にある。以上よ
 り、老岐への渡海には、南東季節風が卓越する夏季には登望駅を、
 北西季節風が吹く冬季には逢鹿駅を利用したと考えられる（木下二
 〇〇九）。

また、どちらの駅についても『肥前国風土記』には、氣長足姫尊、
 すなわち三韓征伐伝説のある神功皇后が来た際の逸話にちなんで名
 付けられたという伝承が記されていることも注目される。ここから
 も、これらの駅が朝鮮半島との経路上にあつて軍事的にも、非常に
 重要な機能を果たしていたことをうかがうことができる（二三）。

ただし、七世紀後半以降の外交使節の場合、先述のように筑紫を
 経て瀬戸内海に入り、難波に向かったが、難波までは船を用いてい
 たと考えられる。そのため、『魏志』倭人伝にみえる魏使の経路と異
 なり、東松浦半島から陸路で東に向かったとは考え難い。その場合
 は、老岐から直接博多に向かう可能性もないわけではない。

そこで、『入唐求法巡礼行記（四）』をみると、承和五年（八
 三八）六月条に、次のような記述がある。

十七日夜半、得二嵐風一、上レ帆揺レ櫓行。巳時、到二志賀島東
 海一。為レ無二信風一、五箇日停宿矣。

廿二日卯時、得^二良風^一、進發、更不^レ覓^レ澳、投^二夜暗^一行。

廿三日巳時、到^二有救島^一。東北風吹、征留執^レ別。比^レ至^二酉時^一、上^レ帆渡^レ海、東北風吹。入^レ夜暗行、兩船火信相通。

六月十七日に博多を出発した遣唐使船は、志賀島の東海で風を待って五日間停泊し、二十二日に東北風を得たために進発したが、澳（いりうみ）もとめずに西に向かい、二十三日には有救島（^五）に到っているのである。

この時の遣唐使は、朝鮮半島經由の「北路」ではなく、五島列島から一気に東シナ海を渡って長江河口付近を目指す「南路」をとったので、その意味では九州から朝鮮半島に渡る際の経路を表しているわけではないが、ここで注目したいのは「不^レ覓^レ澳」という表現である。「澳」とは、船の停泊できる海岸を意味している。つまり、博多湾を出て西に向かった遣唐使船が途中どの港にも立ち寄らなかったことについて、わざわざ「不^レ覓^レ澳」と記しているのである。これは、九州北西部沿岸を航行する船は通常、所々の港に立ち寄りながら進むものであるということを表しているといえるだろう。

また、後代の日宋貿易においても、東松浦半島の沖合の島々に宋商人が停泊していたことが知られる（田中二〇一二）。以上のように朝鮮半島から博多湾に入り、上陸して大宰府に向かう外交使節であっても、直接博多湾に向かうとは限らず、基本的にはまず東松浦半島を経由していたといえるのではないだろうか。

このように、外交使節の来日に際しては、対馬・壱岐を経た後、まず東松浦半島に渡り、その後東に進んで博多を目指したと考えられる。

博多は、日本における朝鮮半島への窓口として意識されることが

多い。たしかに、鴻臚館の衰退後も中世の博多では唐坊が發展し、宋商人たちとの交易がなされた他、大内氏と結んだ博多商人による日明貿易の拠点ともなった。近世には江戸幕府による通交統制により、博多はその外交機能を長崎に奪われることになったものの、現代では高速船ビートルで釜山と直接短時間で結ばれるなど、窓口として意識されることが多い。しかし古代においては、博多は外交使節が日本本土で最初に発着する地というわけではなく、あくまで内陸に位置する大宰府の外港として機能していたのである。

また、朝鮮半島側の発着地も、古代は釜山ではなかった。

『魏志』倭人伝にみえる経路について、一九七五年六月二〇日（八月五日）にかけての四十七日間にわたって、復元船「野生号（^九）」で韓国の仁川港から博多まで航海する日韓共同の実験が行われた（^七）。この実験では、出入国の関係で日本への渡海は釜山から出発したため、出航後に洛東江から流れる濁流と潮流による潮目を容易に乗り切ることができず、さらに乗り切った後には潮流によつて漂流を余儀なくされた。最終的には時間の関係から曳航されることになったが、そのまま漂流すれば山陰か北陸の海岸に漂着する可能性があった（^八）。しかしこれは、釜山から出発したために洛東江に阻まれることになったのであり、狗邪韓国が所在した洛東江西岸の金海から出発すれば、洛東江の流水に沿って沖合の巨済島か南兄弟島まで容易に南行でき、そこから南西風を利用すれば対馬北岸までたどり着くことができるようである。そもそも、釜山が交易地として発達するのは高麗・朝鮮時代からであることも考え合わせると、古代においては金海周辺が朝鮮半島側の発着地であったといえる（東一九八六）。

以上のように、釜山―対馬―壱岐―博多という入境経路のイメージは、博多と釜山が日朝それぞれの対外的な窓口であるという意識とともに、後代（場合によっては航路が整備される近代）になってから形成されたものであり、古代の外交使節は、まずは東松浦半島を経由していた^{（九）}。大宰府は、日本本土における最初の寄港地というわけではなかったのである。

ではなぜ、大宰府が古代において西海道の中心地かつ外交の窓口となり、さらには大宰府を経由するルートが「旧例」「古例」であるとする意識まで生じたのであろうか。先述のように、逢鹿駅や登望駅は、季節風を利用した航海のための重要な拠点となっていた。たしかに、東松浦半島の先端付近には平地は少なく、それに比べて福岡平野に位置する博多が行政機関の所在地としてより適切であるとはいえるかもしれない。しかし、東松浦半島においても、半島の付け根まで南下すれば唐津平野があり、実際、この地には『魏志』倭人伝にみえる末盧国が所在したと考えられている^{（一〇）}。博多が最初の窓口というわけではなかったのであれば、関門海峡と瀬戸内海を経由して上京する外交使節を留め置く窓口を大宰府におく必然性はどこにあったのだろうか。在地勢力による外交交渉という視点から考えてみたい。

三、多元的な外交交渉と王権

古代国家にとっての外交拠点である大宰府の設置について考える上で重要なのが、それ以前における外交交渉のあり方である。

日本と朝鮮半島の統一国家間の外交交渉は、『日本書紀』に百済が日本に朝貢した三六〇年代の記事がみえる。この頃の朝鮮半島情勢

は、『晋書』や『三国史記』によれば、三六九年以来の三年間、百済と高句麗が激しい戦闘を続け、三七一年に百済が勝利をおさめ、翌年には晋に入朝している。この時期に百済の世子が倭王に送ったのが、七支刀である。七支刀の記述からは、百済が倭王の地位を承認し、百済と倭国が国交を結んだことが推測される。さらに高句麗好太王碑文には、三九一年に倭国が高句麗と交戦したことが記されている。このように、四世紀の後半にヤマト政権は、倭国内における軍事・外交の主導権を確立したのである。（仁藤二〇一三）

しかしこのことは、それ以前の日本列島と朝鮮半島の間で交流がなかったことを表しているわけではない。

考古資料をみると、玄海灘沿岸部へは竈や鉄鋌などのような、先進的な文物や生活様式が朝鮮半島、特に加耶から伝来したと考えられる。この時期は日本においても朝鮮半島においても古代国家の成立過程にあり、それぞれの地域における内部の問題（内政）に重点が置かれていたため、王権レヴェルでの国際外交は希薄であったが、地域レヴェルでの交流は活発に行われていたことを表している（西谷二〇一四）。

そして四世紀後半以降、ヤマト政権は外交権を掌握していくことになる。そのことを端的に表しているのが沖ノ島における国家的祭祀の成立である。

沖ノ島は、玄海灘に浮かぶ孤島で、九州の宗像まで約六〇キロメートル、壱岐まで約五九キロメートル、対馬まで七五キロメートルという位置にある【第4図】。この島では、縄文時代には既に漁業活動を行う民が短期滞在していた痕跡があり、弥生時代の遺跡からは釜山周辺から出土する無紋土器も発見されており、古くから日本と

朝鮮半島を結ぶ重要な場所にあったことが分かる（宗像大社二〇〇三）。

沖ノ島では、四世紀後半から九世紀にかけて、国家的な祭祀が行われた^(三)。沖ノ島は、関門海峡・対馬北岸・朝鮮半島を結ぶほぼ一直線上に位置し、関釜フェリーのルートとも近いものの、古代の技術でこの経路を航海するのは海流等の関係で容易ではない。そのため、先に述べたような朝鮮半島―対馬―壱岐―東松浦半島という安全に航海できるルートから大きく外れた沖ノ島において、なぜ国際交流に関わる祭祀が行われるようになったのかということについては諸説ある。

しかし少なくとも、四世紀後半という祭祀の開始時期は、ヤマト政権が朝鮮半島との王権レヴェルでの交流を開始した時期と重なり、王権の意向が働いてのことであると考えられる。

このことは、宗像三女神が記紀神話に占める位置からも認識できる。宗像三女神の神話は、『日本書紀』神代紀の本文と三つの一書（別伝）や『古事記』にみられるが、それは、アマテラスとスサノヲのウケヒ（誓約）の際にアマテラスがスサノヲの十握剣を嚙んで吹き出した気噴の狭霧の中からタゴリヒメ（田心姫神）、タギツヒメ（湍津姫神）、イチキシマヒメ（市杵島姫神）の三女神が誕生したというものである。つまり、宗像氏の信奉する神々を『日本書紀』はアマテラスの子として描いており、それだけ宗像三女神が重要な位置を占めているということである（白石二〇一一）。

これは何を表しているのだろうか。宗像三女神はそれぞれ、田心姫神は沖津宮（沖ノ島）に、湍津姫神は中津宮（大島）に、そして市杵島姫神は九州本土の辺津宮（田島）に祀られており、それらを

総称として宗像大社とよばれている。そして、『日本書紀』神代上・第六段本文に、

此則筑紫胸肩君等所^レ祭神是也。

とあるように、宗像三女神は胸肩氏によって祀られた。つまり、胸肩氏が祀る沖ノ島において国家的な祭祀が行われていたということである。この頃、胸肩氏は宗像地方において力を持ち、沖ノ島を掌握するなど、朝鮮半島との交流も行っていた。一方、百済や高句麗などの抗争が続く朝鮮半島との交渉に直接乗り出したヤマト政権が、胸肩氏を取り込むことによって、各地の豪族が個別に行っていた朝鮮半島との交流ルートを掌握し、外交権を確立していったと考えられる。だからこそ沖ノ島の祭祀は、胸肩氏という一豪族によるものにとどまらず、国家が関与するものとなったのである。そして、律令国家の段階になっても沖ノ島は対外交流において重要な位置を占め続けたからこそ、祭祀が継続し、さらには記紀を編纂する際にも、宗像三女神をアマテラスの子とするかたちで神話をまとめていったのではないだろうか。

また、『日本書紀』における宗像三女神に関する記述で、もう一つ注目されるのが、一書第三において「水沼君等祭神是也」と記されていることである。この水沼君の本拠地は、九州でも筑後川河口に近い有明海沿岸であると考えられている。ではなぜ、有明海沿岸の勢力の名前が挙がるのであろうか。ここには、新たな勢力が対外交渉に関わるようになってきたことが関係している。

五世紀前半から中葉頃になると、玄界灘沿岸と洛東江河口付近を結ぶ倭・韓の交易・交渉ルートにも大きな変化が生じた。この頃から、洛東江河口付近へ新興の新羅が進出し、加耶諸国の中でも金官

伽耶国などがそれまで対倭交渉に果たしていた役割が果たせなくなり、代わって加耶でも西寄りの大加耶を中心とする洛東江中流域やその南の安羅、さらにはより西方の現在の全羅南道を中心とする地域が、対倭交渉に重要な役割を果たすようになった。五世紀後半から六世紀初頭に、前方後円墳が全羅南道各地に造営されるようになるのはそのためである。そのような中で、それまで玄界灘沿岸地域にのみみられた大型前方後円墳が、有明海沿岸でもみられるようになった。五世紀前半になると佐賀平野に佐賀県佐賀市船塚古墳（墳丘長一一五メートル）などが現れるようになり、また肥後の菊池川中流域でも、五世紀前半には熊本県山鹿市の岩原双子塚古墳（墳丘長一〇二メートル）などがみられるようになった。一方で、それまで倭・韓の海上交渉活動を主導していた玄界灘沿岸西部地域では、五世紀初頭以降急速に前方後円墳の規模が小型化していった。このように、玄海灘沿岸西部地域に替わって有明海沿岸地域の諸勢力が、対韓交渉・交易活動の主導権を握るようになっていったと考えられる。（白石二〇一一）

このような有明海沿岸の勢力の対外進出は、様々な史料からうかがうことができる。

まず、菊池川中流域に五〇〇年前後に営まれた江田船山古墳は、火国の地方豪族が「典曹人」としてワカタケル大王（雄略天皇）に仕えていたことを物語る鉄刀銘で有名であるが、ここからは金銅製装身具や土器などの百済系遺物も出土しており（西谷二〇一〇）、この地域の豪族がヤマト政権に仕えつつ、朝鮮半島との交流も行っていたことを表している。

また、球磨川下流域を本拠地とした火葦北国造と百済との関わり

も注目される。特に、火葦北国造刑部鞆部阿利斯登とその子の日羅は六世紀の対外交渉において重要な役割を果たした。

『日本書紀』敏達天皇十二年（五八三）是歳条に、

（前略）於_二檜隈宮御_二寓天皇之世_一、我君大伴金村大連、奉_二為国家_一、使_二於海表_一、火葦北国造刑部鞆部阿利斯登之子、臣達率日羅、聞_二天皇召_一、恐畏来朝。（後略）

とある。当時政権内で権力を握っていた大伴金村によって刑部鞆部阿利斯登は、加耶地域における倭の権益の維持を目指して朝鮮半島に派遣されたのである。

また、子の日羅は、この史料にあるように「達率」という身分を有していた。達率は、百済の十六等の官位の第二位であり、日羅は百済の高官となった人物であったということである。さらに『日本書紀』敏達天皇十二年（五八三）七月朔条に、

詔曰、属_二我先考天皇之世_一、新羅滅_二内官家之国_一。（天国排開広庭天皇廿三年、任那為_二新羅_一所_レ滅。故云_二新羅滅_一我内官家_一也。）先考天皇、謀_レ復_二任那_一。不_レ果而崩、不_レ成_二其志_一。是以、朕当奉_レ助_二神謀_一、復_二興任那_一。今在_二百済_一火葦北国造阿利斯登子達率日羅、賢而有_レ勇。故朕欲_レ與_二其人_一相計_上。乃遣_二紀国造押勝与_二吉備海部直羽嶋_一、喚_二於百済_一。

とある。敏達は任那諸国の滅亡にあたり、「賢而有_レ勇」という日羅に半島政策について諮問することを願い、招聘したのである。しかし日羅は、諮問に答えた後、しばらくして百済使によって暗殺されてしまった。そして日羅の遺体は、火葦北国造の一族によって葦北の地に移された（三三）。

日羅の行動で注目されるのは、まず敏達が日羅を招聘した理由が、

任那復興に関する諮問であるということである。敏達は詔の中で、先帝である欽明天皇の二十三年に任那が新羅によって滅ぼされたことをあげ、日本にとって不利になりつつあった朝鮮半島情勢を打開し、任那復興を成し遂げると宣言している。そこで、百済の高官として朝鮮半島情勢に精通していたであろう日羅への諮問を望んだのである。しかし日羅は、『日本書紀』敏達天皇十二年（五八三）是歳条に、

（前略）恩率参官、臨罷国時、（中略）竊語德爾等言、計下吾過筑紫許上、汝等偷殺日羅者、吾具白王、当賜高爵。身及妻子、垂榮於後。（後略）

とあるように、王からの褒章を得られると考えた百済使によって暗殺されてしまった。さらに死の間際に、「此是我驅使奴等所為。非新羅也。」^(三)と言っている。鉄資源を産する加耶地域の権益をめぐっては、日本列島と朝鮮半島の諸勢力が長く争ってきた。半島における倭国の勢力が後退しつつあった当時、倭国・百済・新羅それぞれが利権が交錯する国際情勢にあつて、肥後出身ながら百済の高官になっていた日羅は、難しい立場にあつたといえる。そのような中で暗殺されてしまったのである。

このように日羅が、各国が複雑な外交を重ねた当時の倭国と朝鮮半島にあつて、各国の思惑の狭間で行動できたのは、肥後を拠点とする豪族が、時としてヤマト政権の枠組みを超えた独自の対外交渉網を築き上げていたからであるといえるだろう。日羅のようにヤマト政権以外の国に仕えて高い地位にのぼった者は多くはなかったかもしれないが、それでも日羅はその死後、一族によって葦北に葬られているのである。このことは、日羅が帰属したのはヤマト政権で

も百済でもなく、火葦北国造であつたということを表している。つまり、それだけ独自の対外交渉を行うことができたということである。

火葦北国造については他にも、次のような史料がある。『日本書紀』推古天皇十七年（六〇九）四月庚子（四日）条に、

筑紫大宰奏上言、百済僧道欣・惠彌為首、一十人、俗七十五人、泊于肥後国葦北津。是時、遣難波吉士德摩呂・船史龍、以問之曰、何来也。对曰、百济王命以遣于吳国。其国有乱不得入。更返于本郷。忽逢暴風、漂蕩海中。然有大幸、而泊于聖帝之边境。以歛喜。

とある。百済から呉に向かった百済の僧侶や俗人が、入国できずに帰途についたところ、暴風にあつて漂流し、倭国の边境に漂着したというものである。漂着地については「泊于聖帝之边境」とあるだけなので特定はできないが、葦北津は天草諸島と九州本土に挟まれた内海にあるので、東シナ海を漂っていた船がピンポイントに偶然この津に漂着したわけではないだろう。この地域の豪族が百済との交流を持っていたからこそ、百済人たちは葦北津に「泊」まつたと考えられる。

さらに律令国家の時代になつても、肥後の勢力が外交上の役割を担っていたことをうかがわせる史料がある。正倉院文書の大宝二年（七〇二）「筑前国嶋郡川辺里戸籍」である。ここからは、肥君猪手という人物が筑前国嶋（志麻）郡の大領であつたことがわかるが、さらに「戸主追正八位上勳十等肥君猪手」（『大日本古文書』一・二九）とあり、戸口を一二四人かかえる富裕な戸の戸主であつた。肥君猪手は嶋郡の在地において大きな勢力を誇っていたのである。（佐

藤二〇一〇a)

糸島半島に所在した筑前国嶋郡は、『魏志』倭人伝において邪馬台国が一大率をおいた伊都国の港にも近く、対外関係においても重要な地域であったと考えられる。元来、有明海に続く八代海沿岸の肥後国八代郡肥伊郷の豪族であった肥君が、玄海灘沿岸にまで進出したのである。このことは、古墳の変化からもうかがうことができる。対馬には六世紀末葉から七世紀頃の巨大な横穴式石室をもつ大規模な終末期古墳がいくつも知られているが、その石室の構造は、基本的にはいずれも筑後・肥後タイプのものである（白石二〇一一）。

以上のように、五世紀初め以降、九州北部では玄界灘沿岸の勢力に変わって、有明・八代海から筑後川流域の勢力が台頭するようになった。このような変化には、先述のように一つには金官加耶国など加耶東南部への新羅の進出という朝鮮半島情勢の大きな変化が関係していると考えられる。そのような中で、海上航路の安全を祈る沖ノ島での祭祀に、胸肩氏とともに有明海沿岸で水運活動に大きな力を持っていた水沼君が参画していたからこそ、水沼君が沖ノ島祭祀を担当していたことを記す『日本書紀』神代上・第六段一書第三の伝承が生じたと理解することができる（白石二〇一一）。さらに、水沼君と同じように、肥君も独自の外交上の地位を占めていたからこそ、糸島半島に拠点を持つことができたのであろう。

このように考えると、胸肩氏が対外関係における機能を喪失したかのようにも思える。では、胸肩氏は五世紀以降どうなっていたのであろうか。

沖ノ島では、四世紀後半からヤマト政権が関与する祭祀が行われ

るようになった。しかし六世紀以降、王権からの直接のカミマツリはしばらくみられなくなる。そして七世紀後半から、ヤマト政権のカミマツリが整備されだし、八世紀初頭に律令制神祇祭祀が成立する。その中で、宗像三座に対して班幣が行われたが、それは宗像神主を通して行われた（西宮二〇一三）。つまり、沖ノ島祭祀という第二段階の岩陰祭祀の時期に、沖ノ島と王権とのつながりは希薄になったとも思えるのである。実際、先述のように玄界灘沿岸地域では、五世紀初めに大型前方後円墳の造営は一時的に衰退した。この時期に、『日本書紀』神代上・第六段一書第三にみえる水沼君につながる勢力が沖ノ島祭祀に参加した可能性がある。しかし、五世紀半ばから宗像地域における前方後円墳の造営は再開され、五世紀後半から六世紀代にかけて、津屋崎古墳群で大規模な前方後円墳が継続的に造営されるようになっていくことになる。このことについて森公章氏は、「宗像君が倭王権の交流史の中で大きな位置を占める」と評価している（森二〇一三）。

では、胸肩氏とヤマト政権との関係は、どのように捉えればよいのだろうか。ここで宗像神や胸肩氏と王権との関係をみてみたい。

『日本書紀』雄略天皇九年二月条に、

遣凡河内直香賜與采女。祠胸方神。（後略）

とあり、さらに同三月条に、

天皇欲親伐新羅。神戒天皇曰、無往也。天皇由是不果行。

とある。雄略天皇は対新羅戦争のために使者と采女を遣わして宗像神を祀らせ、さらに、親征を宗像神の神戒によってとりやめているのである。このように、宗像神は朝鮮半島との対外交渉において神

威を発揮する存在して描かれている（西宮二〇一三）。

また胸肩氏も、『日本書紀』天武天皇二年（六七三）二月癸未（二十七日）条に、

天皇初娶「鏡王女額田姫王」、生「三十市皇女」。次納「胸形君德善女尼子娘」、生「高市皇子命」。

とあるように、娘を天武天皇に嫁がせており、さらに生まれた高市皇子は、太政大臣にまでのぼっている（二四）。

つまり、律令国家が成立するような時期には、宗像神や胸肩氏は王権との深いつながりを有していた。そしてその時期には、先述のように宗像神主を通して王権は宗像神を祀っていたのである。記紀神話において、宗像三女神が重要な位置を占めているのは、こうした王権と宗像神との関係を神話において表現したものであるといえるだろう。このように考えると、六世紀から王権が直接関与する祭祀が見られなくなるというのは、ヤマト政権の祭祀のあり方全体から考えなければならぬものの、必ずしも胸肩氏と王権との関係が希薄化したことによるものではないのだろうか。

ここで、胸肩氏と王権、そして外交の関係について整理してみたい。五世紀初め、有明海沿岸の勢力が百済などとの外交ルートを確認し、勢力が増大する中で、胸肩氏は一時的に後退し、この時期に水沼君の勢力が沖ノ島祭祀に参加した可能性がある。しかしその後、胸肩氏は勢力を挽回する。沖ノ島祭祀が変化し、第二段階の岩陰祭祀になったのはこの頃である。

また、百済との関わりを有する有明海沿岸の勢力の台頭に対応し、王権は江田船山古墳の被葬者などをも従えるようになり、これによって外交権を掌握し続けようとした。そして、大伴金村による五一

二年のいわゆる任那四県割譲問題にあらわれるように、加耶地域の權益をめぐってヤマト政権の対外政策は混乱するが、これ以後、「任那」へのこだわりは維持しつつも、外交上は百済との関係を深めていった。六世紀後半の敏達朝において、日羅に外交政策の諮問を行ったことは、それだけ肥後の勢力がヤマト政権の外交において重要な位置を占めていたことを表している。

一方で胸肩氏は、沖ノ島祭祀への王権の関与が薄れていることにあらわれるように、外交交渉上の役割は有明海沿岸の勢力に奪われて低下した可能性がある。しかし、対新羅戦争に際して宗像神の神威が雄略天皇に影響を与えたように、この頃急速に国力を増強していった新羅（二五）との関係においては、地理的特性からも胸肩氏は一定の役割を果たしたのではないだろうか。つまり、ヤマト政権は百済のような友好関係を新羅とは築かなかったが、新羅を警戒したことから、宗像神主としての胸肩氏は祭祀を行うという点で王権とのつながりを維持したと考えられるのである。

そして七世紀後半になると、唐と結んだ新羅が六六〇年に百済を滅ぼし、倭国は百済再興を目指したが六六三年に白村江の戦いで敗れ、六六八年には高句麗も滅ぼされるなど、それまでの対外関係の大幅な見直しを迫られた。そのような中で、再び胸肩氏との関係が強化されるようになる。胸形君德善の女である尼子娘が天武天皇に嫁ぎ、子の高市皇子が太政大臣にまでのぼっていることは、外交関係が再編される中で胸肩氏が重視されるようになったことを表している。そして、記紀神話の中でもアマテラスの子として宗像三女神が描かれるのである。

今までみてきたように、日本列島と朝鮮半島との間での外交交渉

は、ヤマト政権が独占的に行い得たわけではなく、各地の勢力が独自の交流ルートを維持するなど、多元的なものであった。では、このような状況の中で七世紀後半以降、大宰府や鞠智城はどのように位置が定められたのであろうか。

四、大宰府と鞠智城の位置と機能

六六〇年の百済滅亡をうけ、倭国は百済復興を目指し、斉明天皇自ら、難波津から瀬戸内海を西に向かった。途中、大泊海（備中国下道郡）や伊予の熟田津などに寄って各地で兵を集め^(二六)、九州の朝倉宮に入った^(二七)。つまり、この時代に王権は軍隊を一元的に動員するようなシステムを有しておらず、白村江の戦いに参加したのは、大王との従属的な関係によって参戦した者や、斉明天皇や中大兄皇子らによる直接的な動員に呼応した者などであり、実態としては地方豪族の軍を束ねたものであった（佐藤二〇一〇b）。

だからこそ白村江での敗戦後に中央集権国家を志向し、さらには防衛体制を整備するために大宰府や古代山城などを設置していくのであるが、その際に課題となったのが、外交と防衛を一元化することであったことは想像に難くない。すでにヤマト政権は、四世紀後半には国内における軍事・外交の主導権を確立していた。しかしそれはあくまで、史料にも多くあらわれる朝鮮諸国との外交使節のやり取りや、朝鮮半島への出兵に関して主導権を発揮したということであり、先述のように実際には、有明海沿岸の勢力が百済との独自の交流を行うなど、前代からの地域間の結びつきは維持されていた。そのような中で、王権はそれらの対外交渉を掌握し、さらには統一的な軍事システムを築こうとしたのである。ここでは在来の勢力と

外交ルートをいかにして掌握するかということが問題となってくる。そこで設置されたのが、大宰府や鞠智城である。

大宰府の成立について考える上で参考になるのが、「筑紫大宰」の初見となる先に挙げた史料^(二八)である。筑紫大宰は中央に対して、百済人の僧侶などが「泊^二于肥後国葦北津」と報告しているのであるが、先述のようにこの地域の豪族が百済との関係を有していたからこそ、葦北津に「泊」まったと考えられる。筑紫大宰の報告は、ヤマト政権が「大宰」によって外交権を掌握しようとしていたことを表していると考えられる。その後大宰府は、北海道における行政の中心かつ重要な外交拠点となり、外交使節の滞在場所ともなった。新羅などからの外交使節が安置され、入京が許されるか否かの判断を待つ場所ともなった。

しかし、大宰府は内陸に位置しており、博多湾には迎賓館として筑紫館（後の鴻臚館）が置かれた。「筑紫館」としての初見は『日本書紀』持統天皇二年（六八八）二月己亥（十日）条であるが、『日本書紀』天武天皇二年（六七三）十一月壬申（二十一日）条にはすでに、

饗^三邯子・新羅薩儒等於筑紫大郡。賜^レ禄各有^レ差。

とある。「筑紫大郡」の所在地や機能は未詳であるが、難波には「難波大郡」とよばれるものがあつた。これは、五六一年に百済・新羅の使者を難波大郡で次序したとあり^(二九)、推古天皇十六年（六〇八）に隋使を難波大郡で饗したとある^(三〇)ことから、外交を司る役所であつたと考えられる。また、六三〇年に「難波大郡」を三韓館とともに「修理」したとある^(三一)ことから、大郡が行政区画の名称でないことも分かる（直木一九九一）。「筑紫大郡」も同じような機能をも

有していたとすると、博多湾沿岸に所在したと考えられるだろう。

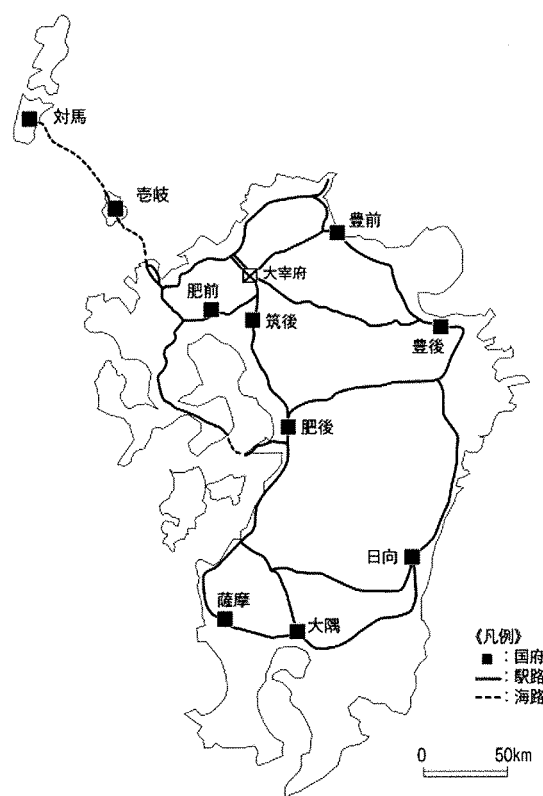
このように、早い段階から博多湾沿岸に迎賓のための施設が置かれる一方、大宰府は沿岸から十五キロメートル程も内陸に置かれ、鴻臚館と大宰府は直線官道で結ばれた。大宰府が内陸に置かれたことには、もちろん対外防衛上の理由もあるだろうが、あえて福岡平野と筑紫平野を結ぶ回廊部に置かれ、しかも筑紫平野側の守りのために基肄城が置かれたことには、それ以外の理由が考えられる。

斉明天皇が置いた朝倉宮は、博多湾ではなく、筑紫平野に面する位置に置かれた。斉明が各地で直接兵の動員を行っていたことを考えれば、これは多分に有明海沿岸の勢力を意識したものであったといえる。

また、白村江の敗戦後、天武・持統朝にあたる六七九年～六九四年にかけて、外交使節を畿内まで入れずに、筑紫において対応しており、さらに筑紫大宰には皇親があてられる事例が多くみられる。

これは外交権を天皇の下に一元化することと関連すると評価されているが（田島一九八六、森一九九五）、入京させないことにどのような意味があるかという問題はおくとしても、少なくともこの時期に、大宰府において統一的な外交を行う機能が確立していたということを表している。

つまり、福岡平野と筑紫平野を結ぶ位置に大宰府を設置し、さらには大宰府を起点とする官道網を整備する【第6図】ことで、流動化する国際情勢の中にあって、前代から独自の外交ルートを持っていた肥後の勢力を確実に抑え、王権が外交権を掌握することを目指したということである。だからこそ、大宰府に一度安置してから入京させるという中央集権的な外交使節の入境管理に国家はこだわりの



第6図 九州の官道

大宰府→瀬戸内海→難波という入境ルートが、「旧例」「古例」と意識されるようになったと考えられる。

同様に鞠智城の築城も、外交ルートの一元化との関連で捉えることができるだろう。鞠智城は、はじめに述べたように他の古代山城と比較して、なだらかな立地にあり、官道と車路で結ばれているものの、有明海を見渡す位置にはない。そのため、外敵が攻めてきた際の防衛のためにつくられたとは考え難い。むしろ、それまで独自の外交ルートを持っていた肥後の勢力に対する抑えの意味があったと考えられるのである。

五、鞠智城の存続理由

最後に、鞠智城の存続理由について考えてみたい。

瀬戸内海沿岸の山城は八世紀以降、対外的な緊張が緩和される中で次々とその機能を停止していった。七一九年には備後の茨城・常城が停廃されている^(三三)。他、鬼ノ城も出土遺物は八世紀初頭までのものがほとんどであり、奈良時代になるとその役割を終えたと考えられる。一方で鞠智城は、一〇世紀まで存続したことが注目される。鞠智城は筑後方面や阿蘇、さらには豊前へ抜けることもできる位置にあり、交通の要衝である(宮川二〇一三)ということも影響しているだろうが、山陽道に沿う山城が存続しなかったことを考えると、鞠智城の存続には特有の理由があると推測される^(三四)。

鞠智城をめぐるのは、軍団との関係が指摘されている。筑前国の御笠団は大野城と、肥前国の基肆団は基肆城と関係があり、それぞれ番を作って城の警護に当たったと推測されることから、鞠智城の場合も付近に軍団があり、兵士が交代で勤務したと考えられる(笹山二〇一〇)。

さらに、九世紀後半には、鞠智城に關係する以下のような史料がある。

『日本文徳天皇実録』天安二年(八五八)

閏二月丙辰(二十四日)…肥後国言、菊池城院兵庫鼓自鳴。

丁巳(二十五日)…又鳴。

六月己酉(二十日)…大宰府言、去五月一日、大風暴雨。官舎

悉破、青苗朽失。九国二島尽被^二損傷^一。又肥後国菊池城院兵庫鼓自鳴。同城不動倉十一宇火。

『日本三代実録』貞観十七年(八七五)六月二十日条

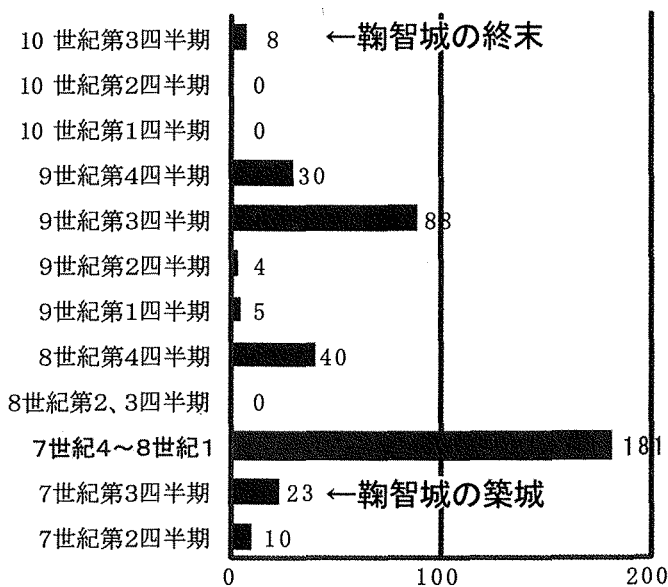
大宰府言、大鳥二集^二肥後国玉名郡倉上^一。向^レ西鳴。群鳥數百、噬^二拔菊池郡倉舎葺草^一。

『日本三代実録』元慶三年(八七九)三月十六日条

又肥後国菊池郡城院兵庫戸、自鳴。

このように、「兵庫」などの記述がみられ、鞠智城に何らかの軍事的な機能があつたことが分かる。鞠智城に関連する六国史の記述は、六九八年の修理の記事を除くとこれらの記事がなく、しかもすべて九世紀後半に集中している。さらに、鞠智城から出土した土器の数量も、七世紀末〜八世紀初頭の次に多いのが九世紀の後半なのである。【第7図】これは何を表しているのだろうか。

九世紀、新



第7図 鞠智城出土土器の時期別数量比較(数字は個体数)

登場することには、関連があると言わざるを得ない。先述のように、鞠智城は有明海そのものの監視には適さない。そのため、例えば新羅海賊が有明海に侵入するといった事態への対応を想定しているとは考え難い。むしろ、築城の背景と同じように、混乱の中で在地の勢力が新羅の地方政權などと結びつくことを警戒したのではないだろうか。実際、九世紀後半の史料には、新羅海賊と通じていたとして日本人が処分される記事^(三四)や、日本に滞在・帰化していた新羅人が東北などに遷されるといった記事^(三五)が多くみえる。国家が対外戦争までを想定していたとは考え難いことから、むしろ在地勢力が成長してくる時期にあつて、伝統的に独自の外交ルートを持っていたこの地域において、在地勢力を警戒して鞠智城は存続し続けたと考えることができるのではないだろうか。

おわりに

鞠智城跡「特別研究」に採用いただき、各地の古代山城をまわる機会を得た。以前訪れたことのある屋嶋城と鬼ノ城に加えて、鞠智城をはじめ、金田城、大野城、基肆城、大廻小廻、城山城（讃岐）、高安城と見て、登ってまわるうちに、古代山城の中での鞠智城の特性が際立って思えるようになった。鞠智城は必ずしも直接的な対外防衛を目的とした施設ではないのではないか。そうした想定のもとに、朝鮮半島情勢や九州における各地の勢力の盛衰を交えつつ、この地に鞠智城が設置された背景について、外交使節の入境経路や、ヤマト政權による外交権の確立過程などから検討したのが本稿である。

古代山城については文献史料が圧倒的に少なく、古墳などの考古

学的な成果や状況証拠から考えていかなければならないことが多い。そのため本稿でも、実証の不十分な憶測を交えて論を展開してしまっているところが多々あるかと思う。また、全体的に雑駁な論になつてしまった。そういった点について、ぜひご指導・ご批判を賜れば幸いである。

注

(一) 日本の古代山城については、斎藤忠氏が『国史大辞典』の「神籠石」の項において「神籠石の名は福岡県久留米市高良山にあるものが、高良大社に関連して用いられたものであり、学術用語として現在広く採用されている。しかし、遺跡の性質が明らかにされている現在、必ずしも適切な名とはいえない。伝承名を尊重しながら神籠石式山城の名を用い、基肆城・大野城のごとき朝鮮式山城と区別することも一つの方法であろう」と述べているように、朝鮮式山城と神籠石系山城に分けることがある。しかし、例えば朝鮮式山城とされる鞠智城の場合も築城記事そのものは存在しない他、所在地や実態が不明なまま朝鮮式山城とされているものもある。そこで本稿では、特に両者を区別することなく、「古代山城」の名称を用いる。

(二) 『日本書紀』天智天皇八年（六六九）八月己酉（三日）条、『日本書紀』天武天皇四年（六七五）二月丁酉（二十三日）条、『日本書紀』持統天皇三年（六八九）十月庚申（十一日）条

(三) 『日本書紀』舒明天皇四年（六三二）十月甲寅（四日）条
唐国使人高表仁等、泊于難波津。（後略）

(四) 『日本書紀』繼体天皇六年（五一二）十二月条・敏達天皇十二年（五八三）是歲条

(五) 『日本書紀』皇極天皇二年（六四三）三月癸亥（十三日）条

- (六) 『日本書紀』推古天皇十六年(六〇八)四月条
- (七) 『日本書紀』舒明天皇二年(六三〇)是歳条
- (八) 『日本書紀』推古天皇十六年(六〇八)四月条
- (九) 『続日本紀』天平宝字三年(七五九)十月辛亥(十八日)・十月丙辰(二十三日)・十二月辛亥(十九日)・十二月丙辰(二十四日)条
- (一〇) 『続日本紀』宝龜二年(七七二)六月壬午(二十七日)条
- (一一) 実際、日本の遣唐使は、はじめは朝鮮半島に渡った後、半島の西海岸沿いに北上し、黄海を渡って山東半島に至る「北路」をとっていたが、新羅との関係が悪化し、五島列島から東シナ海を一気に渡る「南路」をとるようになってから、事故が増えるようになった。
- (一二) 東松浦半島からは、壱岐を遠望することができる。
- (一三) 豊臣秀吉も、東松浦半島の先端部に名護屋城を築き、朝鮮出兵のための前線基地とした。
- (一四) 承和の遣唐使に随行して入唐した慈覚大師円仁の旅行記である『入唐求法巡礼行記』には、この時の遣唐使の入唐の経路が詳細に記されている。
- (一五) 有救島は現在の宇久島で、五島列島のうちの最北部に位置する。
- (一六) 弥生時代の銅鐸絵画・絵画文土器、古墳時代の西都原の船形埴輪、古墳壁画、新羅・伽耶の船形土器など三〇五世紀の資料に基づいて復元された(東一九八六)。
- (一七) 日本側の航海計画の立案や総指揮は、平野邦雄氏が行った(東一九八六)。
- (一八) 渤海使の航路を考える上でも示唆的である。
- (一九) 現在では圧倒的に博多に出る方が便利である壱岐や対馬が長崎県に属していることは、前近代の交通経路を考える上でも示唆的である。
- (二〇) 佐賀県唐津市の中心地近くに所在する桜馬場遺跡が、末盧国

- の王墓であると考えられている(糸島市立伊都国歴史博物館二〇一一)。
- (二一) 沖ノ島での祭祀は、
 - (一) 岩上祭祀(四世紀後半〜五世紀)
 - (二) 岩陰祭祀(五世紀後半〜七世紀)
 - (三) 半岩陰・半露天祭祀(七世紀後半〜八世紀前半)
 - (四) 露天祭祀(八世紀〜九世紀末)
 という変遷をたどることが知られている。
- (二二) 『日本書紀』敏達天皇十二年(五八三)七月朔条・是歳条
- (二三) 『日本書紀』敏達天皇十二年(五八三)是歳条
- (二四) 『日本書紀』持統天皇四年(六九〇)七月庚辰(五日)条
- なお、ここでの太政大臣は、後の律令制下の太政大臣とは異なるものであり、天皇大権の代行者としての身分であったと考えられている。(日本古典文学大系『日本書紀』(岩波書店)補注)
- (二五) 六世紀前半は、真興王(在位五四〇〜五七六)が、洛東江や漢江の流域を掌握し、新羅が百済や高句麗に対抗し得る勢力へと成長し、さらに王権が強化された時代である。
- (二六) 『日本書紀』齐明天皇七年(六六一)正月壬寅(六日)条、
- (二七) 『三善清行意見封事十二箇条』所引『備中国風土記』逸文
- (二八) 『日本書紀』齐明天皇七年(六六一)五月癸卯(九日)条
- (二九) 『日本書紀』推古天皇十七年(六〇九)四月庚子(四日)条
- (三〇) 『日本書紀』欽明天皇二年(五六二)是歳条
- (三一) 『日本書紀』推古天皇十六年(六〇八)九月乙亥(五日)条
- (三二) 『日本書紀』舒明天皇二年(六三〇)是歳条
- (三三) 『続日本紀』養老三年(七一九)十二月戊戌(十五日)条
- (三四) 玄海灘沿岸の山城は、『続日本紀』天平勝宝八歳(七五六)六月甲辰(二十二日)条と『続日本紀』神護景雲二年(七六八)二月癸卯(二十八日)条に怡土城の築城記事があるように、八世紀以降も存続しているものもあるが、それは直接的な対外防衛を意識してのことであろう。

(三四) 『日本三代実録』貞観十一年(八六九)十月二十六日条
(三五) 『日本三代実録』貞観十二年(八七〇)二月二十日条など

参考文献

- 東潮 一九八六 「古代推定船(野性号)の復元と航海」『倭と加耶の国際環境』吉川弘文館 二〇〇六所収
- 石井正敏 一九七〇 「大宰府の外交機能と外交文書」『日本渤海関係史の研究』吉川弘文館 二〇〇一所収
- 石井正敏 一九八七 「八・九世紀の日羅関係」田中健夫編『日本前近代の国家と対外関係』吉川弘文館
- 糸島市立伊都国歴史博物館 二〇一一 『平成二三年度 伊都国歴史博物館秋季特別展『邪馬台国』を支えた国々―今使驛所通三十國―』
- 石見清裕 二〇〇九 『唐代の国際関係』山川出版社
- 上田雄 二〇〇二 『渤海使の研究―日本海を渡った使節たちの軌跡―』明石書店
- 岡田茂弘 二〇一〇 「古代山城としての鞠智城」笹山晴生監修『古代山城 鞠智城を考える―二〇〇九年東京シンポジウムの記録―』山川出版社
- 小田富士雄 二〇一一 「古代九州の朝鮮式山城新考―とくに都城制型山城の設定をめぐる―」『鞠智城とその時代―平成十四〜二一年度「館長講座」の記録―』熊本県立装飾古墳館分館 歴史公園鞠智城・温故創生館
- 狩野久 二〇一一 「鬼ノ城はなぜ『日本書紀』に登場しないのか―その編集方針から推理する―」『鬼城山 国指定史跡鬼城山環境整備事業報告』岡山県総社市文化振興財団
- 木下良 二〇〇九 『事典 日本古代の道と駅』吉川弘文館
- 笹山晴生 二〇一〇 「鞠智城と古代の西海道」笹山晴生監修『古代山城 鞠智城を考える―二〇〇九年東京シンポジウムの記録―』山川出版社
- 佐藤信 二〇一〇 a 「古代史からみた鞠智城」笹山晴生監修『古代山城 鞠智城を考える―二〇〇九年東京シンポジウムの記録―』山川出版社
- 佐藤信 二〇一〇 b 「白村江の戦いと地方豪族」笹山晴生監修『古代山城 鞠智城を考える―二〇〇九年東京シンポジウムの記録―』山川出版社
- 白石太一郎 二〇一一 「ヤマト王権と沖ノ島祭祀」『宗像・沖ノ島と関連遺跡群』研究報告Ⅰ『宗像・沖ノ島と関連遺跡群』世界遺産推進会議
- 総社市教育委員会 二〇一二 「古代山城 鬼ノ城―展示ガイド―」
- 高橋誠一 一九七二 「古代山城の歴史地理―神籠石・朝鮮式山城を中心に―」小田富士雄編『西日本古代山城の研究』名著出版 一九八五所収
- 田島公 一九八六 「外交と儀礼」岸俊男編『日本の古代 第七巻 まつりごとの展開』中央公論社
- 田中史生 二〇一二 『国際交易と古代日本』吉川弘文館
- 東野治之 二〇〇七 『遣唐使』岩波書店
- 直木孝次郎 一九九一 「難波津と難波の堀江―大化以前を中心に―」『難波宮と難波津の研究』吉川弘文館 一九九四所収
- 西谷正 二〇一〇 「朝鮮半島から見た鞠智城」『鞠智城東京シンポジウム 古代山城鞠智城を考えるⅡ 東アジアの中の古代鞠智城』資料 熊本県教育委員会
- 西谷正 二〇一四 『古代日本と朝鮮半島との交流史』同成社
- 西宮秀紀 二〇一三 「文献からみた王権・国家のカミマツリと神への捧げ

- 物 ―沖ノ島祭祀の歴史的前提―」 「宗像・沖ノ島と関連遺産群」 国際
学術研究報告会レジュメ
- 仁藤敦史 二〇一三 「倭国の成立と東アジア」 『岩波講座 日本歴史 第
一卷 原始・古代Ⅰ』 岩波書店
- 濱田耕策 一九八三 「中・下代の内政と対日本外交」 『新羅国史の研究』
吉川弘文館 二〇〇二所収
- 日野尚志 二〇一一 「古代の官道」 『鞠智城とその時代 ―平成十四〜二
一年度「館長講座」の記録―』 熊本県立装飾古墳館分館 歴史公園鞠智城・
温故創生館
- 藤井一二 二〇一〇 『天平の渤海交流』 塙書房
- 古瀬奈津子 二〇〇三 『遣唐使の見た中国』 吉川弘文館
- 古畑徹 一九九四 「渤海・日本間航路の諸問題」 『古代文化』 四六
- 丸山雍成 二〇〇九 『邪馬台国 魏使が歩いた道』 吉川弘文館
- 宮川麻紀 二〇一三 「鞠智城築城の背景 ―肥君の拠点と交通路の複
眼的検討―」 『鞠智城と古代社会』 第一号
- 宗像大社 二〇〇三 『宗像大社神宝館 沖ノ島大宝展記念 「海の
正倉院」 沖ノ島』
- 森公章 一九九五 「古代難波における外交儀礼とその変遷」 『古代日
本の対外認識と通交』 吉川弘文館、一九九八所収
- 森公章 二〇一三 「交流史から見た沖ノ島祭祀」 「宗像・沖ノ島と関
連遺産群」 国際学術研究報告会レジュメ

挿図出典

- 第1図 岡田茂弘二〇一〇
- 第2図 柿沼 撮影二〇一三
- 第3図 総社市教育委員会二〇一二
- 第4図 「宗像・沖ノ島と関連遺産群」 世界遺産推進会議パンフレッ
ト
- 第5図 木下二〇〇九
- 第6図 日野二〇一一
- 第7図 熊本県教育委員会パンフレット「鞠智城 ―鞠智城の築城とそ
の変遷―」
- 第1表 小田二〇一一